



追悼 水木しげる

ゲゲゲの人生展

夏休み企画展インタビュー

夏休み企画として『追悼水木しげる ゲゲゲの人生展』が開幕します。展覧会を企画した朝日新聞社の藤本圭太企画委員に展覧会について聞きました。

バナナを食べる水木夫妻 1989年 ©水木プロダクション

「追悼水木しげる ゲゲゲの人生展」はどのような展覧会ですか？

今回の展示は2015年に亡くなられた水木しげるさんの人生を振り返って追悼する展覧会になります。一人の人間が生まれてから亡くなるまでの生き様をそのまま展覧会にした、人間ドキュメンタリーのような意味合いがあります。水木さんは、戦前、戦中、戦後の時代を生き、高度経済成長期のなか、売れっ子漫画家として成功し、その後は自分の好きなことをしようということで世界に飛び出し妖怪研究をしました。一作家の展覧会ですが、日本の近現代史を見るような展示ともいえます。驚いたことに、水木さんは各時代の自分の記録をたくさん残しています。画家になりたいと思っていた少年時代の作品や戦時中に家族に送った手紙、戦地で描いた絵、それこそ“へその緒”(!)も残しています。その頃から今回のような展覧会をやることをわかっていたのかと思うほどです。

これだけの資料が残っていることはご存知だったのですか？

2004年に「大(Oh!)水木しげる展」を企

画したときに、こうした作品や資料を目にして、どのようなものをお持ちなのかは概ね知っていました。今回は追悼展ということで、初出品の作品を中心に展示しようということになりました。世界各地へ冒険旅行に出掛けて行ったときの、仕事以外の水木さんの姿というのを紹介してみました。それから、水木さんは家族との時間を非常に大切にされていて、写真を沢山撮っていたのですが、今回はご遺族にお願いして、こうしたプライベート写真も特別に出品させていただきました。妻の布枝さんにもインタビューして、貧乏時代のお話も伺っています。

藤本さんはこれまで何度か水木しげるさんの展覧会を担当されてきたと聞いています。関わりを教えてください。

私が水木さんの展覧会をするのは、実はこれで4回目なんです。私は元々妖怪が大好きで2000年に「大妖怪展」という展覧会を企画したのですが、その時に水木さんから妖怪画をお借りしたのが始まりです。水木さんとお会いする度にどんどん人間的な魅力に惹かれていって、漫画だけでなく、

自伝なども読んでいるうちに「次は水木さん自身の展覧会がやりたい」ということになって企画したのが「大(Oh!)水木しげる展」(2004~06年)でした。この展覧会は荒俣宏さんや京極夏彦さんに監修してもらい、水木さんの波瀾万丈の人生をたどりつつ、水木さんが生み出した漫画の世界に来場者を放り込もうという展覧会でした。3年間で全国12会場を巡回し、28万人を動員するロングヒットとなりました。第3弾の「GeGeGe水木しげるの妖怪樂園」(2013年)は水木さんが夢に描いた妖怪たちの樂園を作ろうというのがコンセプトでした。水木さんは「明るい現代社会は妖怪たちが棲む世界が無くなってしまった。どこかに妖怪と人間が楽しくふれ合える樂園があったらいいなあ」といつも言っていたからです。会場には闇の中で木々のざわめきや雷の音と振動だけで妖怪の気配を感じてもらおう部屋を作りました。元々形のないものに水木さんが形を与えたように、来場者にも水木さんの気持ちになって妖怪の姿を想像して欲しいという狙いでした。



朝日新聞社 企画事業本部 藤本 圭太 企画委員

たらしいなあ」といつも言っていたからです。会場には闇の中で木々のざわめきや雷の音と振動だけで妖怪の気配を感じてもらおう部屋を作りました。元々形のないものに水木さんが形を与えたように、来場者にも水木さんの気持ちになって妖怪の姿を想像して欲しいという狙いでした。

今回の展示は、NHKの連続ドラマ「ゲゲゲの女房」がヒットした後初めての展覧会ということもあり、水木さんの「結婚」をエポック的に取り上げて、貧乏で苦しかった時代の生活を再現しているコーナーもつくりました。本展はこれまでの展覧会の集大成と言ってもいいでしょう。

今回、戦記漫画についても展示されています。水木さんにとって戦争のテーマとは何だったのでしょうか。

戦争のテーマは過去の展覧会でも取り上げましたが、今回は特に、出征前の不安や苦悩を記した手記を初めて出品しています。2015年に見つかったこの手記からは「生とは何か？ 死とは何か？」といった問題について、哲学書を読み漁って考えていた様子が伺えます。我々が知るのんびりとした水木さんのイメージとは異なる、深刻な一面を見ることができます。「出征前手記原稿」は傷んで読めないところもありますが、よく見ると「芸術が何だ哲学が何だ。今は考える事すらゆるされない時代だ。」などと読めます。やはり、死が身近にある環境と、画家になりたいという思いの葛藤があったのかもしれない。

戦記漫画の描写には力が入っています。『総員玉砕せよ!』(1973年)などは自分の体験を描いているといわれますが、戦地に行った人間でないと描けないリアリティが



ズンゲンで爆風を受ける 1988年



砂かけ婆 1984年(展示:8月7日~9月2日)

あります。水木さんのなかでも戦争体験を後世に伝えなければという思いが強かったと思います。それは生前お話ししても感じたことです。

戦争では不条理な体験をしているのですが、かといって声高に反戦を唱えるわけでもないところが水木さんらしいと思います。片腕を失うなど酷い体験をした一方で、南島の現地の人々との交流があり、戦争によって地獄と天国の両方を体験したというのがあると思います。戦争はいろんな意味で特別な体験であり、その後の人生に大きな影響を及ぼしていると思います。

沖縄で開催することについてはどのようにお考えですか？

本展はどうしても沖縄で開催したいと思っていました。水木さんも喜んでくれていると思います。ここ沖縄の展示では、沖縄戦を題材にした作品(「沖縄に散る一ひめゆり部隊哀歌」など)の特別展示も行います。戦争が深い傷あとを残している沖縄に

とって特別な展覧会になると思います。また、沖縄には妖怪がたくさんいるので、新たに18点の妖怪画を追加して紹介します。*

今回の展示で、ぜひ見て欲しいところを教えてください。

一人の人間がこれだけ多くの作品を生み出したというのを、一堂に見られる機会はないと思います。貴重な原画だけでなく、多忙だった時代の書齋を実寸大で再現して、そこに鬼太郎や妖怪たちが現れるコーナーなど、水木さんらしい遊び心のある楽しい展示となっているのもお伝えしたいです。また、妖怪博物館というコーナーでは、水木さんが集めた民族資料コレクションが展示され、怖い雰囲気も味わえます。それから、水木さんの魅力はやはり出版された漫画であり、その描写とストーリーだと思いますので、ショップでは水木漫画も多数扱っていますので、是非買って読んでほしいと思います。

*沖縄関連展示は複製作品と書籍で紹介いたします。

「追悼水木しげる ゲゲゲの人生展」

7/11(水) - 9/2(日) 企画ギャラリー1・2
2018

一般 1,100(880)円、高校・大学生 900(720)円、小・中学生 600(480)円

※()内は20人以上の団体料金 ※未就学児は無料

※障がい者手帳提示者1名と介助者1名まで半額

休館日:月曜日、7月17日(火) ※ただし、7月16日(月・海の日)は開館

主催:一般財団法人沖縄美ら島財団、沖縄テレビ放送、朝日新聞社

企画協力:水木プロダクション 協賛:ライブアートボックス 協力:テクノネット、クロステック